
メタトロン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタトロン

【Nコード】

N2544P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

生真面目なモリアーノ神父の前に現れた天使。彼が語ることは。キリスト教の天使を扱った作品です。

第一章

メタトロン

モリアーノ神父は生真面目な人物であつた。

彼は信仰を忠実に守つていた。このことは誰もが認めるところであつた。

それはバチカンでもだ。あまりにも有名になつていた。

それで彼を司教、果てには枢機卿にまで抜擢しようという声もあがつていた。だが彼はその声に対して自分から毅然として言つのであつた。

「その様なものは望んでいません」

「望んでいない」

「地位はですか」

「地位も名誉もです」

そうしたものゝ望んでいないと。はっきりと言つのである。

「望んでいるのは信仰のみです」

「神への信仰」

「それだけなのですか」

「はい」

まさにその通りだというのだ。

「それだけです」

「なら地位も名誉もいらぬ」

「それはまた凄いな」

「これこそ真の神の僕だな」

「全くだ」

皆それを聞いて感心して頷く。そうしてであつた。

彼は己のその言葉通りただ神を信じて生きていた。その信仰こそが全てであつた。だがその彼の前にだ。何かが来たのだった。

「モリアーノアよ」

「んっ？」

彼は自分のいる教会の礼拝堂で祈りを捧げていた。一日の終わりにはだ。そこで祈りを捧げることを日課にしているのである。

それで一日の最後の祈りを捧げているとだ。彼の上から声がしてきたのだ。

「よいか」

「誰だ、私を呼ぶのは」

「私だ」

こう言つてであつた。一人の天使が彼の前に降り立つた。

その姿は白銀に輝き何処か人間とは全く違うものを感じさせる。

背中の翼もまた銀色であり身体と同じく硬い。そんな身体であつた。

「貴方は一体」

「メタトロンという」

その天使はこう名乗つてきた。

「それが私の名前だ」

「メタトロンというのか」

「知っているな」

メタトロンはまた彼に言つてきた。

「この名前は」

「知っている。天使の長の一人だつたな」

「そうだ。今日ここに來たのはだ」

「理由があつてか」

「理由がなくて來ない筈がない」

メタトロンは彼にこうも言つてきた。そしてだ。

「御前の話は聞いている」

「左様か」

「そうだ。神に絶対に仕えているのだつたな」

「そのつもりだ」

「このことを隠さない。

「それがどうかしたのか」

「それでここに来た。御前は神の言葉に従うのだな」

「無論だ」

その白銀の天使を前にしてだ。彼は毅然として答えた。

「それが信仰なのだからな」

「では聞こう」

天使はここまで聞いてだ。あらためて彼に問うてきた。

「いいか」

「それで何だ」

「御前は神が死ねと言われたら死ぬか」

「死ねと告げられたらか」

「そうだ、その時は死ぬか」

まずはこう問うのだった。

「そして神がある者を殺せと言えば殺すか」

「殺すとか」

「そして世界を滅ぼすと言えば」

話はさらに大きくなっていった。

第二章

「その場合は滅ぼすのか」

「それが私への問いか」

「如何にも。どうするのだ」

メタトロンは彼を見据えながら言葉を投げ続ける。

「貴様は。どうするのだ」

「答えるべきなのだな」

「答えないことは許されない」

メタトロンは最初からそれはないとするのだった。

「そういうことだ」

「わかった。それではだ」

「うむ。どうするのだ」

「まず神が仰ったことは絶対だ」

「これはだ。前提だというのである。」

「それは言っておこう」

「そうか」

「そしてだ」

神父はさらに話す。

「神が真に神ならばだ」

「それで従うというのか」

「その通りだ。まずその神が私が仕える真の神ならば従う」

「こゝ前提を置くのだった。」

「まずはその前提が必要だ」

「ふむ、それでか」

「そしてだ」

神父の言葉は続く。

「私に罪があれば神はそう仰るだろう」

「死ねとか」

「そしてその者に罪があればか」
「殺すか」

「如何にも。まずはこの二つから答えよう」
この前置きが話された。

「そして」
「そしてか」

「神は仰った。自ら死を選んではならない」
このことを話す。神の教えではだ。自ら死を選ぶことは許されて
いないのだ。

「そしてだ」

「そしてか」

「そうだ。人を殺してもならない」

このことも言うのだった。

「人が人を裁くのか」

「神の言葉でもか」

「神は自ら言われたことを覆されることはない」

その信仰を話した。

「そうだからだ。私に死ねと仰る筈がない」

「そう考えるのだな」

「そして神は仰った。人が人を裁くのではなく」

「神だな」

「神が裁かれる。ならば私がすることではない」

「では世界を滅ぼすこともか」

「それだな」

三番目にして最後の問いにもだ。彼は答えるのだった。

「それについてだが」

「どう考えているのだ」

「これもまた神が私に命じられる筈のないこと。その時は神が自ら
そうされるだろう」

「神が御自身でだな」

「世界に罪があればだ。だが」

「だが、か」

「神が世界を滅ぼされることは有り得ない」

断言であった。

「それは絶対でない」

「ないか」

「そうだ、有り得ないことだ」

そうだというのである。

「何があるうともだ」

「何故ないと言える」

「神は人を作られたな」

「うむ」

「神は過ちを犯されない」

よく言われていることだ。彼は今それを天使に告げたのである。

第三章

「その神が創られた人が過ちなのか」

「それはないか」

「そしてこの世界もだ」

世界についても言った。

「神が創られたもの。過ちであるのか」

「それはない」

メタトロンもそれはないとした。

「その通りだ」

「そしてだ」

神父の言葉は続く。

「神は全てを愛されるな」

「そうだ」

天使は神父の今の言葉もその通りとした。

「愛されている。常にだ」

「愛するものを滅ぼし壊そうとする者がいるか」

神父はその言葉を続ける。

「神はその様な歪な心を持っておられるというのか」

「持つておられる筈がない」

これが天使の返答だった。

「その様なものをだ」

「答えはそれだ」

ここまで話してであった。

「神はその様なことは絶対になされぬ」

「見事だ」

天使もここで言った。

「全てそなたの言う通りだ」

「間違いではないのだな」

「全てそなたが言う通りだ。神は過ちを犯さない」
「まずはこのことを認めた。」
「そして全てを愛されている」
「私が言った通りだな」
「神父よ、そなたは全てをわかっている」
「このことも言うてみせた。」
「見事だ。そなたは完璧な信仰を持っている」
「いや、完璧ではない」
「神父は今の天使の言葉も否定した。」
「私は完璧ではない。その信仰もだ」
「そう言う根拠は何だ」
「私の人だからだ」
「だからだというのである。」
「完璧なのは神だけ。人がどうして完璧であろうか」
「神が創られたものであるうともか」
「神は人が傲慢になり独善にならぬように完璧でなくした」
「それでなのだな」
「そうだ。人は完璧ではない」
「またこの事実を話す神父だった。」
「人であるからこそだ」
「そうだな。しかしそなたの信仰はだ」
「完璧ではないにしてもだ」
「見事だ」
「今度の言葉はこれであった。」
「その信仰、確かに聞かせてもらった」
「そうか」
「その信仰を守れ」
「守りそのうえでか」
「人々に仕えるのだ。それがそなたの務めだ」
「彼を見てだ。こう告げたのである。」

「わかったな。生きている限りそうするのだ」

「最初からそのつもりだ」

神父の返答は迅速であり謹厳なものであった。

「迷いはない」

「今は、か」

「かつて。若き日は迷いはあった」

このことは認められた。

「しかし今はない。だからこそ私は今ここにいるのだ」

「それもわかった。それならばさらにだ」

「進むだけか」

「進め。神の道を」

それをだと告げた。

第四章

「よいな」

「うむ」

「そなたの様な者がいる」

メタトロンはそこにも見ていた。彼がこうして人間としているということにもだ。そこにもあるものを見出しそれを言葉として出すのであった。

「人はまだまだ伸びるな」

「完璧でないからこそ伸びる」

また言う神父だった。

「そういうことだ」

「そうだ。ではだ」

「帰るのだな」

「私の本来の世界にな」

天界である。まさに天使のいるその世界だ。

「そこでさらに見させてもらおう」

「そうするがいい。それではな」

「機会があればまた会おう」

こう話してだった。天使は神父の前から姿を消したのであった。

それ以降神父はだ。その信仰だけでなく学識や教養でもだ。人々を導き大きな力となった。

だが彼はそれに奢ることはなかった。あくまで神の僕としての己を忘れなかったのである。

これを見ながらだ。メタトロンは他の天使長に対して話すのであった。彼等は天界の壮麗な宮殿から人間達を見ているのである。

「あれもまた人間なのだ」

「あれもか」

「悪事を重ねている者達だけでなくか」

「ああした連中も確かに人間だ」

メタトロンはいわゆる悪人達についても認めた。

「しかしそれでもだ」

「あの者もまた」

「人間か」

「人は善でもあり悪でもある」

彼はこうも言った。

「ああした者もいるのだ」

「では我々はそれを踏まえて」

「以後導くべきか」

「最後の審判はせずともいい」

メタトロンはそれはいいとした。

「それよりもだ。まずはだ」

「人を導くことか」

「ああした者達を見て」

「そうするべきだ。この様なものはだ」

予言の書を手に出した。そうしてだ。

その書を持つ手の平から炎を出した。それで書を焼いてしまった。後に残ったのは灰だけだった。それは風に散って消えていった。

「こうすればいい」

「では我々はこのまま」

「神の創られた世界、そして人を守り」

「導いていくべきだな」

「そうするでしょう。神と共にな」

こう話してであった。メタトロンは人間達を見守るのであった。そこには色々な人間達がいた。そして神父も。そこで人々を導いていた。

メタトロン 完

2
0
1
0
·
8
·
3
3
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2544p/>

メタトロン

2010年12月1日20時55分発行